

崔書勉先生と私

(株)クレディセゾン常勤監査役 櫻井 勝

崔書勉先生は、私達にとっては大変失礼ながら「お友達崔先生」である。崔先生のお考えに関係なく私達の思い込みかもしれない。「私達」とは、崔先生を囲む一〇数名のグループであり、昨年四月の九〇歳のお誕生日をお祝いする会で日韓談話室の方々とごいっしょさせていただいた者達である。メンバーは何組かの夫婦等からなる。

崔先生には落合一秀さんが主宰する中国関係の研究会で初めてお目にかかったが、特に親しくなったのは、〇六年にメンバーの中心的存在である大森寿明さんのお嬢さんがハワイ留学中に知り合った韓国人男性とソウルで結婚式を挙げてからのことである。一般人の結婚に過ぎないのに、結婚式には日本から親戚・我々仲間等三〇数名が参加、これが崔先生の目にどう映ったかは知らない。それ以来、崔先生が来日される度に先生を囲んで懇親会を開いている。赤坂等で鳴らした崔先生には申し訳ないごく普通の居酒屋・レストランでにぎやかに楽しんでいる。もちろん毎回、過去の日韓関係の背景・秘話、竹島問題をはじめとする現在の日韓問題等について崔先生から極めて意義深いお話しを拝聴し、極めて貴重な機会となっている。同時に崔先生は、メンバーの家族のこと等にも話題をふるなど意外な人間的側面を見せてくれる。この会の常連には、権鎔大さんや堀口松城さんがおり、小川郷太郎さんや黒田福美さんも時々参加される。

この会での私の苦痛は、前述の結婚式で私が下手な韓国語で祝辞を述べ歌ったことを崔先生が喜ばれ、その後も会合の都度それを再演しなければならぬことである。二、三度は苦痛と言いなながら結構楽しみながらやっていたことも事実であるが、仲間がまたかという眼差しで聴いているような気がして気が引けるのである。このグループで何回も韓国を訪問したが、その都度崔先生が私達のために開催していただく夕食会の席上でも同様であり、韓国高官の前でやらなければならない時も多い。この時は内容を変え、例えば「東アジアにおける平和と安定は・・・」などとやや格調高くやらねばならず、事前の準備と直前の韓国語丸暗記がしんどく、これを終えなければ酒も食事も楽しめないのである。もつとも最近では私も崔先生の「命令」か

ら逃げるのが上手になってきた。

もう一つの苦痛は、懇親会場が二階や地下でエレベーター等が無い時、知識が一杯詰まった大きなお腹を秘書の方といっしょに前後左右から抱えなければならぬことである。これも苦痛と言いつつも崔先生との身体的密着により共に生きていくと実感できる楽しいひと時でもある。一番最近の時は崔先生の体の動かし方がこれまでより軽快に感じられ、とても嬉しく思った。

大きなお腹といえば、ある時崔先生の依頼で菊池光興国立公文書館館長（当時）を紹介したことがある。このことを崔先生はとても喜び感謝された。この菊池さんは私の高校の一年先輩だが、崔先生にひげをとらない巨漢で、大きなお腹の持ち主である。性格的にも温厚で気配りのある点、崔先生によく似ている。同氏も読書家だから、大きなお腹にはやはり知識がたくさん詰まっているのだろう。崔先生は同氏と馬が合うようであった。お二人のお腹がいつまでも大きいままでありますように！私が日韓談話室に加えていただいたのは、大森義夫元内閣情報調査室長の推薦である。大森義夫さんとは、ロッキード事件捜査で私が香港に派遣された時、領事として香港に駐在されていた同氏にお世話になって以来で、その後も役人時代を通じて可愛がっていたが、日本電気NECにも同氏からの「一本釣り」で入社させていただいた。同氏はよく新聞、雑誌に寄稿し著作もあるが、これまた際立った読書家で崔先生との共通項がある。上陸五十五周年記念号にも同氏の文章が掲載されており、その辺を窺わせる記述があるが、誠に残念ながら昨年九月十一日逝去された。

役所の先輩と言えば、崔先生からは内務省時代の先輩方の名前をよく耳にする。なかでも、秦野章元警視総監・法務大臣が参議院外交委員長時代に訪韓した時の安重根をめぐる逸話は面白く、タカ派のイメージが強烈な秦野さんのハト派のかつ幅広い側面を垣間見ることができた。また、日本上陸直後某警察庁筆頭課長が崔先生に名刺を渡し、困ったことがあればこの名刺を提示すれば大丈夫と保証した由、崔先生の人脈の広さにはいつも驚かされる。まだまだ興味深い秘話もあるが、事柄の性質上この程度にしておきたい。

私の自慢話は、崔先生から香港製麻雀牌をいただいたことである。懇親会で麻雀に話しが及び、崔先生が次回来日の際に君に麻雀牌を持って来ると述べられた。私はうかつにもすっかり忘れていたら（先生ごめんなさい、今初めて白状します）、次の来日時に持参いただいた。とても重いもので、有難いのと崔先生の相変わらず抜群の記憶力には、ただただ脱帽した。

なお、前述の私達のグループには女性が数人いるが、女性への気遣いは男性へのそれをはるかに上回っていることも指摘しておきたい。

上陸六〇周年の記念集にはふさわしくない雑文となり、しかも敬愛する崔書勉先生に対してははなはだ失礼な文章となってしまうが、いずれも崔先生との小さな思い出深い歴史であるのでご容赦いただきたいと思う。私達は崔先生との楽しい交流を大事にしながら、これからも日韓相互理解を深めるため地道な努力を続けて行く所存です。

崔先生、今度はいつ日本に帰って来ますか？

